

れていいのか、ということである。

もっとこれから学習しなければならない問題が多々あり、とくに注目されるのは、日蓮聖人がこうした運営についてどのように考えられていたのだろうかということである。例えば、身延山久遠寺の運営については、『身延山史』などではわからない。われわれの寺は、宗派教育からいえば、久遠寺の延長線上にあるが、いろいろな図書を読んでも、久遠寺の位置づけや評価が明確なものはない。仏教についての紹介書はたくさんあるが、寺院に関するものはない。寺のない仏教の紹介の本ばかりである。われわれは久遠寺の足場（土台）となつているように思うのであるが。

日蓮聖人にとつて、寺とは、久遠寺とは何だったのだろうか。どうして十間四面の大坊を建立されたのであるのか。私はこういうことを問いかけたい、聖人にたずねたい。いまは遺文を通してこれを推定しなければならぬ。「教化学」の中で寺院を位置づけてもらいたくない。否、位置づける「教化学」が確立されなければならぬ。学問の上で寺院というものを認知していただきたい、ち

つとも認知されていないのであるから。文化庁から出された寺院建築関係のある書物の中に、文化庁は、日蓮宗は寺院の建築に対しては貧困である、とはつきり書いている。

寺というものをリアルにありのままに考えていかなければならない。そう考えることが、今日問われている課題であるのではないかと思う。寺の内部にいる者が寺を考えているわけであるが、寺の外部にいる者が寺とは何かと問うように、われわれは心を一新して問い直して考える必要に、いま迫られている。

## 未信徒教化の事例と

### その今日的意義

井 本 学 雄  
(兵庫県妙典寺住職)

教師には、どうして、どのようにして布教というもの

が出てくるのか。これは本仏の誓願である。私は自分なりにそれを受けとめて檀信徒と共に今日まできている。

本仏は、一切衆生を教え導いて、自分と少しも変わらない境地にしていきたいという誓願を持っている。日蓮聖人は「速かに実乗の一善に帰せよ」と述べ、その願業は一天四海皆帰妙法である。

未信徒には、檀信徒の中の未信徒と他宗のそれとがいる。未信徒教化については、すでに宗門で護法運動・統一信行という形で推進され、それは、檀家の信仰から個人の信仰へ、を指して未信徒を完べきな信者に変えていくことが目的であったと思う。お題目によって同志結合をし、信者が心を一つにし手を取りあつて行動し、本仏や聖人の教えに従つて大曼荼羅の世界に一步一步近づいていく、という信仰の輪を広げていく願いがあつたと思う。

私が廃寺同様の寺に赴任して最初にやったことは、街角で通学児童の交通安全指導で、それを十三年間続けた。それが縁で、ある会社で法話をするようになった。そこで仏様の話をし、これが経営者協会にまで広がった。こ

うして未信徒に対し寺が近づいた。寺で座禅をしたいという声を機に、寺に修養道場を開いた。会社研修の中に二時間ほどの時間をとつて、仏教とはどういう教えかとか、人の生活の問題などを話した。はじめから日蓮聖人は……と切り出すと、拒絶反応をおこしてダメ。通仏教的な話だと、人は非常に聞く耳をもつ。帰りには名前・住所を記してもらい、ここに伝道はがきの縁ができた。

はがきには通仏教を常に書き、信行会開催を知らせる。信行会には、これらの三分の一の人達が来、未信徒が信者にはなってくれる。こうしていままでに約五十軒の未信徒を改宗させて檀家にした。そして寺を解放してありとあらゆることに利用した。いろいろな会や催しの中で、十分、二十分と話す機会をつくり、その場が縁となつて参加者が一人、二人と連れてくるようになり、友達の輪が段々と広がっていった。

老人が主に多く来るといイメージのある寺のキャンパスに、私はもう一つ修養道場のキャンパスをあちこちにたてた。しだいにこの道場についての問い合わせが多くなり、それに応えて少年少女・婦人・高齢者の修養道場を開い

て参加者の意見を大切にしたい。この輪は檀家以外の人に広がった。これが寺の中での仕事である。

そのうち外から講演依頼がくるようになり、私はかさずそこに出むいて話をし、そのたびごとに名簿を置いた。私にとってこの名簿は教化の宝である。農協あり企業あり、交通安全協会や学校などから依頼されては話しをするが、そこでは一宗一派の話より宗教心についてが主題となる。またこれが縁となって人がもつと話をききに寺にやってくる。

今、仏教書が大変売れているが、ほんとうに仏法に耳をかたむける人はいるだろうか。人は聞く耳をほんとうに持っているだろうか。ほんとうの本仏の教えの信心とはどんなものであろうか。これだけはゆるされるだろうというような今の世の中になつていっているのではなからうか。心がふらふらしたり信仰がふらついているのではなからうか。こういった人生の問題や課題を、たとえば、『阿仏房御書』にみられる七つの宝の話などと結びつけて、私達の身体や心や人生は金銀のごとくに磨けば磨くほど輝きを増す、といったようなことを話すと、もつとくわし

く教えてくれないか、と話を聞いた人が寺に集まってくる。これが外から寺の中へよびこむ外での私の仕事である。

未信徒に対して一番大切なことは、このように話を求めて来る人を寺によびこんだ場合、住職だけではなく、寺族の者までが共に一生懸命信仰している、やはりあの坊さんはよく信仰しているなあ、と印象を与える姿をみせつけなければならぬことである。もちろんそれは、その時その場をつくろう姿であつてはいけない。宗門の雑誌「正法」のある号に、「坊主の無信心」ということが書かれてあつたが、ほんとうに坊主は無信心であるとみられたならば、そこには人は参集しない。酒は飲むけれども、どんな場合でも、坊主は信仰はすごいな、と思われれる姿をみせなければならぬ。またみせるだけではなく、化けの皮をもたないほんとうの信仰をみせなければならぬ。

寺では、午前六時の朝勤には家族全員が詣でる。終つてみんな合掌して朝のあいさつを交わす。それが、朝参りにくる信者達もお互い合掌のあいさつで、一日がは

じまるようになった。そして二十分ほどの法話をきいて帰っていく。

『法華経』の方更品に「開示悟入」という教えがある。今の世の中は豊かで便利である故に、いねむっている人があまりに多い。そのいねむっている目を開かすのが、私は未信徒教化であると考えている。ぼやぼやしてはいかん、目をさましなさいといつて目を開かず。そこで、いろいろ起こっている事例を示す。そしてわかつたといわせるのであるが、それだけでいいだろうか。ここまでほたいがいゆくのであるが、この先の道に入らしめるのが難しい。つまり、行動をおこすことに至らなくてはほんとうの信仰ではない。道に入らしめる一つの手だては、住職はじめ家族全員が共に修行にいそんでいる姿を、日常生活の中につくりだすことである。お参りしてそのような姿に接することによって、そこに清浄なる気持ちがわいてくるのではないかと思う。

未信徒教化に「報恩感謝」ということがある。朝参りは月の十二日だけでもよいから、十二日ときめ、その日は報恩感謝の集い、ありがたいということでお参りを

しなさい、ということでは始めた。十八日には、尊神会としていたが、家族の安全を祈り合う集いと名称をかえると、家族みんなでお参りに来だした。これらは一例だが、こうした行動を通し、相手が幸福になった時に、はじめで自分も幸福になるのであると指導している。そしてその輪は広がっている。

正月三ヶ日の元旦会には、六、七千人の参詣者になった。車の祈禱が六百台ぐらい。寺には、鬼子母神、水子観音や浄行菩薩の像がある。そこにカンバンを掲げて、「身心共に明るく清らかな行ないができる人づくり」「多くの身心の病みに歯どめをかけるために、人の心の中に仏心をはぐくみ、身心の浄化をお願いしよう」との心得などを記した。また水子観音には、「かけがえのない尊い命を大切にしよう。すべての人が小さな命の重さを知ると共に、闇から闇にほうむられた水子の霊にあなたが心から供養すれば、この世に縁の薄かった水子の霊はどれほど喜ぶことか」などと記した。参詣者には、心からのお題目供養をと勧めている。

このような具体的なことを次々とやっていかなければ、

未信徒の教化は道遠しである。

報恩唱題行は毎月十二日午前五時から行なう、青少年問題の相談は毎日受付ける、ただし希望日は電話で申しつけて下さい、などといったカンバンを、あちこちに出したことが、私は、未信徒が道を求めて動いた一つのキッカケであったと思っている。人はカンバンをみて必ず寺にやってくる。相談・悩みごとには、私で解決できるものもあれば、専門的なものもある。ことが専門を必要とする場合には、市や県にある専門の心理研究所に送りこむのである。いずれにしても私は、悩みごとの要因を、それは宗教心がないから、宗教心のない家族にいるからですよ、信仰しなければいけない、と信仰心をもつことを彼らに提言するのである。

なにごとに対しても、じっとしてられない私の性分が、未信徒教化のほうにむけているのではないかと思う。未信徒教化の今日的意義という問題については、発表できなかつたが、これについては、いろいろと教えてもらいたい。

## 立正平和の精神と行動

― 第二回国連軍縮特別総会に参加して ―

新 間 智 照

(兵庫県妙法華院住職)

一番印象ぶかく、大事な点は、十二日行なわれた国際デモンストレーションの大集会で、約百万人の熱気ある参加であった。四年前の千五百人の参加が、今回は百万人が参加したのであるからその感動は大きかった。

行進は、七日の日本山妙法寺が中心となつて行なつた世界平和大行進、十一日の国際宗教師の行進に、私は手甲脚絆の行脚姿で撃鼓唱題を行なつた。常に日本山妙法寺が中心であるが、今回は十人ほどだが日蓮宗の太鼓隊ができた。とくにニューヨークでの、十五人が横に並び道路いっぱいになつて行進したのが非常に目立ち、日本山妙法寺僧侶だけで五十個の太鼓、そして日蓮宗の太鼓、そのあとに日本山の現地信者の五十個以上の太鼓、総勢